



○心の鏡總目錄

- 心の花畫一
- 印度佛蹟佛陀伽耶圖二
- 同圖說明三
- ナルゴツト像四
- 菅丞相觀念の詞五
- 心の鏡六ページノ上ヨリ廿六ページノ上マデ
- 菅原道真像歌六
- 西行法師像歌七
- 聖德太子像歌八
- 楠正成同九
- 檀林皇后像歌十
- 明慧上人同十一
- 榮西禪師同十二
- 平ノ時頼同十三
- 伴中和尙同十四
- 嵯川親當妻同十五
- 空海上人同十六
- 徳川家康公訓誡十七
- 火の車畫歌十八
- 一遍上人像歌十九
- 親鸞上人同廿
- 法然上人廿一
- 道元禪師同廿二
- 日蓮上人同廿三
- 心猿意馬廿四
- 蓮如上人像歌廿五
- 大覺禪師同廿六
- 孝子韓伯瑜廿七
- 心の扇子畫歌廿八
- 言ハハ勇ク行ハ難シ廿九
- 父母ニ仕フノ道三十ノ三十一
- 道歌數首



秋の醜うみにはるのあふあふ

あふあふはるのあふあふ

あふあふはるのあふあふ

あふあふはるのあふあふ

あふあふはるのあふあふ

あふあふはるのあふあふ



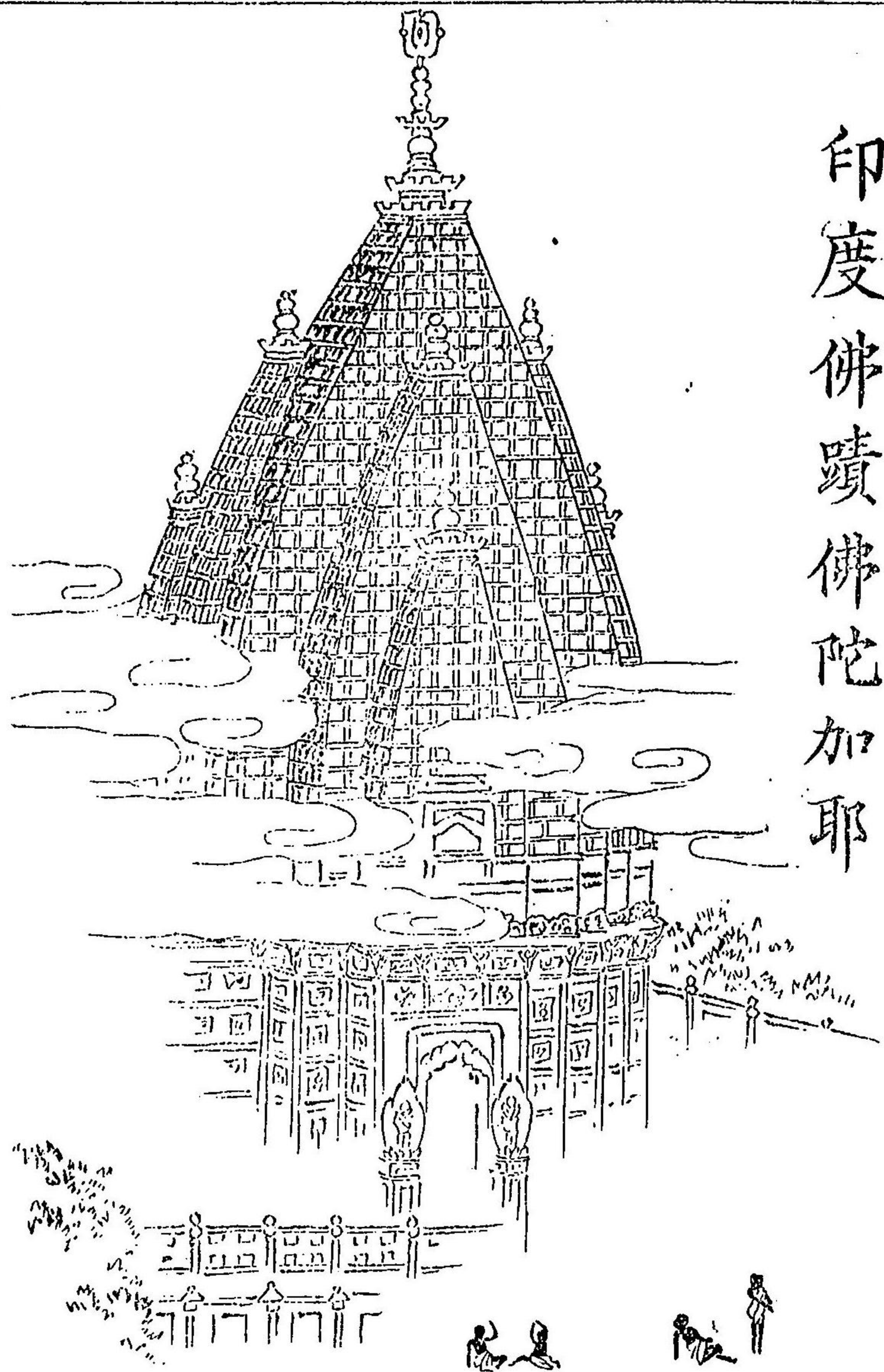
あふあふはるのあふあふ

あふあふはるのあふあふ

あふあふはるのあふあふ

西行法師

印度佛蹟佛陀伽耶



印度佛蹟佛陀伽耶

此塔の高さ一百六十尺、極めて堅牢なる石材を以て二層に造り、下層には釋尊の坐像を安置し、上層には世尊の立像を安置し、隅にも亦おのゝ小塔を造りて、其の中に亦世尊の立像を安置せり、そもく此の塔は今を距ること九百年前、この地の佛教徒と婆羅門教徒との間に鬭争を起して、佛教徒が終に敗死を取りしかば、婆羅門教徒は勝に乗して大いに暴れまはりしかども、流石に規模の宏大にして、築造の堅牢なるに持あまし、止ことをあす土砂を運び來りて埋没し去りしとぞ然るに、今より二十余年前に、英國女王の印度保勝會を組織せられて、此大塔のみに十四萬圓の巨金を投じて、土中より掘出さしめ、且つ大に修理を加へて、月に壹百余圓の看守給をさへ、婆羅門教徒に支給せられて、今日の莊嚴を成就せしめしは、全く七八年前のことなりとゆう



長壽學智靈度印
像高トツコルオ

管丞相 觀念の詞

崑山片玉

三界は皆な苦なり、四生は樂にあらざり、一期は假の栖家、万事みな夢の如し、名官ひさしからば、榮花も終りあり、繁昌は時の間昇進も利那、妻子は身の敵、眷屬は心の怨、貪欲は苦の基、ひ追求は悲みのはじめ、生あるは滅し、樂あれば亦た苦あり、盛なる者は必だ衰ひ、會者は定て離る、命は草の上のつゆ、身は風の前の燈火、はかなきは此世、たのみなきは我身なり、畜生の五欲、人間の八苦、修羅の闘争、天上の五衰、地獄のおそるべき、焰を以て家とし、餓鬼やすからば、飢にのぞみて、子を喰ふ、いかなる獄に落ち、いかなる苦をうけん、淨土は心にあり、無欲なれば、即ち樂なり、三界は安きことなし、猶し火宅の如し、只だ穢土をいとひて、偏に淨土をもとむべし、衆生はこゝに迷ひて、生死海にし、ぞむ凡聖心ろにあれば、苦樂こゝろにあり、淨穢不二、迷悟一躰、佛は此理を覺りて、涅槃の臺に登る、何の時か病をうけ、何の時か死をうけん、早く一如なることを觀じて、本覺の位にのぞむべし

心の鏡

凡そ此世へ生れては
 貴賤貧福おしなべて
 無病長生錢金を
 誰しも願ふ事なれど
 病身天死貧乏を
 いやでもするのは何故ぞ
 前世に我身が蒔置し
 種が此世へはへるなり
 釋迦牟尼如來の御身にも
 三つの御難を受給ふ
 孔子や孟子の聖賢も



菅原之真

時にあわねば是非もなし
 是が因果の道理にて
 萬古不易の掟なり
 誰しも我身を省みよ
 今の我身の苦と樂は
 前世に蒔し種なれば
 今作す業の善惡は
 後世の苦樂の種ぞかし
 惡種を蒔ぬ用心は
 偽りいはぬにしくはなし
 若も人目をかきさるとして
 口と心がちがひなば



西行法師

早く心ざあらためよ
 悪事をかくしてよいやうに
 人目はかざりて、濟すとも
 神と、佛と、心とに
 問はれば、いかゞ答へべき
 此神國に生れては
 わけて、正直第一に
 かげとひなたのなきやうに
 物事律義でひかへぬに
 唯正直にし、くはなし
 然れば強て、禱らざも
 神佛守り、給ふべし



聖徳太子
 櫓を櫓
 されとい
 法り
 みち
 船人に
 まかせ
 ゆ

神や佛に守られて
 無病長生安穩に
 子孫繁昌福徳の
 種まくやうに心せよ
 因果の道理を信ぜれば
 我身の上も人の身も
 鏡にうつして見るやうに
 過去も未来も見らるなり
 此世で、銭金持つ人は
 前世の種のよかりしぞ
 前世で善種まかざれば
 此世で貧苦にせまるなり



楠正成
 仁と義と
 勇
 やさ
 夫
 そのあ
 火をえやま
 舟を遊ばせ

此世で慈善をせぬ人は
 未来で貧苦に逼るなり
 三世はたとへば目の前に
 過ぎ速きはあるとても
 善悪因果はうごきなく
 毛筋も違は報なり
 利口で富貴に成ならば
 鈍なる人は皆貧か
 鈍なる人にも富貴あり
 利口な人も貧をする
 貧乏で子供が多あり
 富貴で子供はなきもあり



権林皇后

己れ死ぶ
 やくな
 うばむ
 野に
 す
 やつたる
 大の腹世
 こせ

いづれも前世の種次第
 我慢や、力や、銭金や
 権威づくにはなりがたし
 富貴に、大小ある事は
 なさげに、大小あるゆへぞ
 又貧賤の大小も
 非道に大小あるによる
 善悪二つに、まく種は
 貧福二つには、わかる
 凡そ因果の理を知るに
 小因大果といふ事を
 能く心に、とくせよ

明慧上人



いはまごの
 めめ
 と
 ぬと
 等あまん
 身き限りあり
 幸いありせむ

たとへば一粒まく種に
 實を數多くむすぶよ
 少の罪をもおそれねは
 報ふ、苦患はかぎりなし
 作す、善根は少にて
 多くの幸うることも
 なぞらへ、知て用心し
 小善としてもすてだ積め
 惡は根を斷ち、葉をからし
 善の芽をさしに、土をひて
 榮ん事を願ふべし
 かゝる謂れをわきまへだ



東西禪師

冬山乃

杉

むら

とも

よみ

おのが

ゆき

大罪ばかり、科と知り
 少の罪は、常として
 とむむる、心なき時は
 水のしたより、いつの間に
 流れて、大河と成ごとく
 小罪としてもおそれねば
 終に、地獄の業となる
 少の善もつもりては
 無量の果報得る事も
 是になぞらへ、知りぬべし
 聖人孔子も、此わけを
 易といふ書に、説給ふ

北條相模守平時頼



ん

あま

心

なれ

く

く

古

人となる身ぞ、思ひなば
 慈悲善根の種をまけ
 やるも、貫も、因縁ぞ
 貧賤富貴の、ありさまは
 皆是、浮世の、習なり
 今貧賤の、その人は
 むかし、長者と、思へし
 富貴も、永くつゞかねば
 さかん、に、暮す、其内に
 慈善の事と、なしと、かば
 貧になりても、名は残る
 金銀田畑山林と

箴中和尚



井の
 はなふ
 遊ぶ
 子より
 何ふ
 あまきハ
 後生
 ねがわぬ
 人の
 永のうへ

いかほぞ、貯おくととも
 衰へぬれば、人の物
 欲にかぎりの、なきものぞ
 あれば、あるほど、足ぬもの
 よく、足事と、知れよとの
 佛の、と、し、と、わきまへよ
 無理して、溜たる、金錢は
 人の、恨の、かゝる、ゆへ
 却て、子孫の、あだとなる
 升や、秤や、算盤や
 筆の、先に、無理するを
 愧て、おそれ、慎めよ

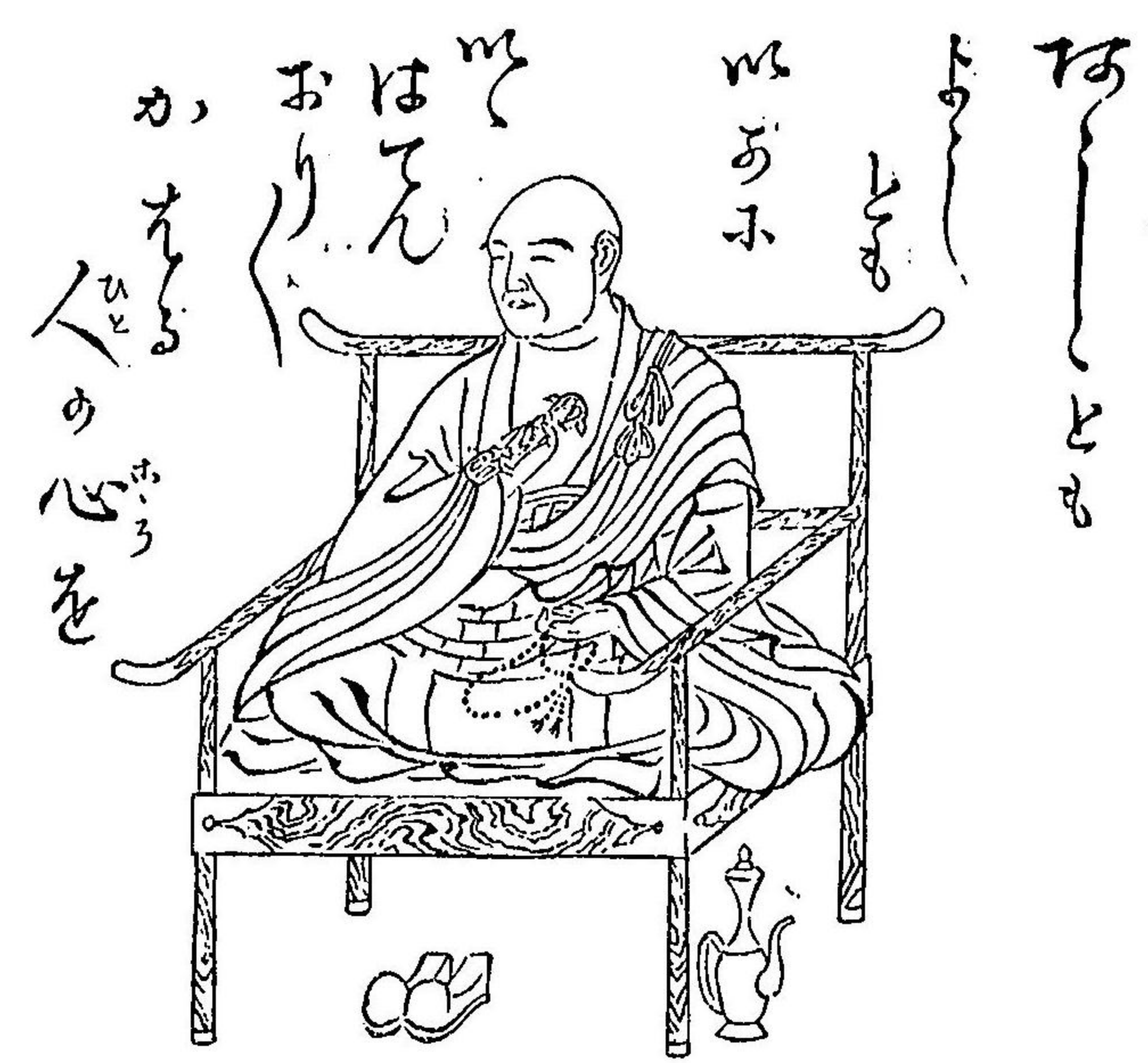
埜川親尚書



あまの
 長
 みぢら
 ちの
 かや
 有母の
 ちの
 何れん

美目はよくても富貴でも
 虚言ほど人の瑕はなし
 高き賤きおしなへて
 人はみめよりたゞ心
 正直柔利といはるゝが
 上なきておらと思べし
 士農工商それぐの
 家業大事に勤るが
 即ち國への忠義にて
 先祖や親への孝となり
 其身も生涯安樂ぞ
 物事非道とするものは

空海上人



一生人ににくまれて
 死ぬれば餓鬼や畜生や
 修羅や地獄におつるなり
 おのゝく、榮花に暮すのは
 前世に蒔きしよき種と
 家業大事に勤むるも
 先祖の苦勞の御蔭なり
 親は物ごと子の爲と
 幼時より身にかへて
 子の爲ばかりはかれ共
 子供の性根あしければ
 親の心は聞ならで

○徳川家康公の訓誡

人の一生は重荷をたふて遠き路を
 行が如し急ぐべからず不自由を常
 におもへば不足なく心に望みおこ
 らば困窮したる時をたもへ勝こと
 はかりて負ふことを知らざれば災害
 其の身にいたる己れを責めて人をせ
 むるなればよばざるは過たるに勝れり
 おこたらば行ば千里の外もみん
 牛の歩行のよしおそくとも
 君は日夜に名號を書し念佛六萬
 遍を修し給ふ

子ゆへに、迷ふ親達は
 世間におほく見るとや
 それに子供は、愚にて
 大恩ありと、知ながら
 恩を報ざる、心なく
 とかく不孝を、するぞかし
 博奕、打たり、盗んだり
 又は、悪所へ、通ふては
 身の分限を、わすればは
 放埒、盡せし、あげくには
 政府の、咎を、蒙りて
 親類、組合、所まで



難儀をかけるのみなら
 我身の上は、ちりくに
 田畑、家財、屋敷まで
 他人の物となりぬれば
 親のなげきは、幾許ぞ
 不孝といふも、あまりあり
 鳩にも、三枝の、禮はあり
 鳥も、反哺の、孝あれば
 親に不孝な子供こそ
 鳥や、鳩にも、劣るぞや
 親を、持たる、人々は
 なるだけ、身持、大切に

時宗祖師一遍上人

唱ふれが

我も佛も

あかり

けり

南無

阿彌陀佛

南無阿彌陀佛



父母へ、孝道、怠るな
あわれ、人々目と、ふさぎ
つくく考へ、見給へや
いかなる、大福長者でも
時節来れば、是非もなし
金銀財寶、妻子まで
捨て、冥途の、旅にたつ
めいどの、旅立する時は
耳も聞へど、目も見へど
行衛も、しれぬ、死出の山
關路に迷ふぞ、あわれなる
此時、一生作りにし



親堂上人

以つくま
とふを
とふふ
人可下
おふ
すの
あんと
あし

罪過業が、むくひきて
病苦や、死苦に、責られて
七顛八倒する時に
いか、後悔するとしても
さらに、かへらぬ事ぞかし
後生は、てんでの、稼にて
助合力は、ならざれば
と、かく、命の、ある内に
後世の、大事を、忘るゝな
人の、命の、もろき事
草場の、露に、ことならだ
今宵、頭痛が、仕初て



法然上人

露の
永日
こか
よて
消る
とも
心日
蓮あり
うてあり

直に死病となるもある
 今朝は機嫌のよき人が
 暮に頓死をするもあり
 今日他人を送りしに
 明日は我身が吊はれ
 妻子財寶此身まで
 みなは無常の物なれば
 よく心に合點せよ
 無常々々とみな人が
 口にかしこくいひ乍ら
 心に慥にしらぬゆへ
 俄に無常にさそわれて

道元禪師



ふきりばゆえ
 ふうねを
 浮雲の
 風まかす
 我が心も

可愛孫子におくれたり
 いとしいつまにわかれては
 世になき事のある様に
 とらに消たき思ひにて
 やるかたもなき悲さに
 尼法師にもなるべしと
 かなしみ思も過ぬれば
 いつしかそれも忘れ果
 程なく元のもくあみと
 なるのみならん更には猶
 放逸邪見を起すなり
 早く御法を聴聞し

日蓮上人

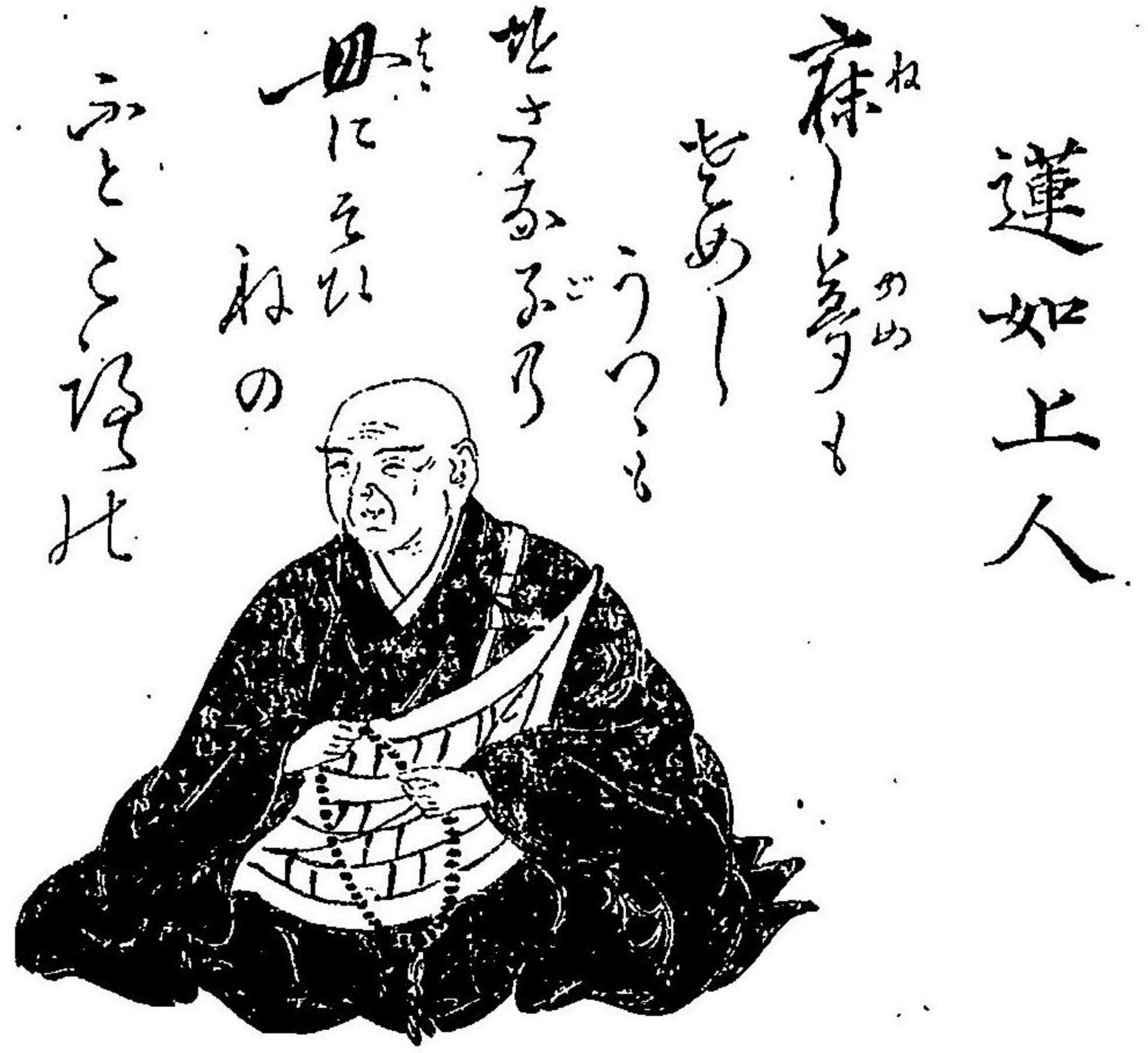


心か
 ふう
 雨
 風
 よるの
 まがくを
 うつらめ

未來佛果に至るべし
 横病横死の難もなく
 生涯無事に日を送り
 定期の命存分に
 持て、此身の終りには
 彌陀の本願あやまたど
 極樂淨土に生るれば
 六神通をとり得て
 生々世々の父母や
 孫や子供や親類を
 自由自在に濟度して
 煩もせど年よらど

○心猿意馬
 吾人が心意の靜整ならざるは馬の
 如く猿の如し之を止めんと欲する
 も能はざるなり○心地觀經の第八
 卷に云心は猿猴の如く五欲の樹に
 遊んで暫くも住せず○大般若經
 卷の第五百六十八に云く飄忽とし
 て停まらざること風野の馬の如し
 と○又安樂集に云く心は野馬の如
 く識は猿猴よりも劇しと云へり
 嵐し吹山また山のどのずから
 花なき方も花の香ぞする

死ぬる事なき身となりて
 その安樂はかぎりなし
 此世は堪忍世界とて
 とかく心のまよならど
 殊更老少不定にて
 明日の請合ならざれば
 永い未來の浮き沈み
 知識を求め用意せよ
 冬のわた入夏ひとへ
 三度の食の用意をば
 忘れど調へ置身に
 一大事ある臨終の



蓮如上人

森々多々
 せあー
 うつゝも
 けさるふるり
 目には
 ねの
 ふととほれ
 うま

用意忘るゝ思さよ
 來世といへば、皆人が
 程あるやうに思へ共
 吹息一つかへらねば
 その場が直に未來ぞや
 此度、苦界をばなれば
 再び時節はなかるべし
 南無阿彌陀佛く

大覺禪師



○父母に答うたるゝに其の痛きに泣かざして其の痛から
 ざるに泣くは眞實の孝子なり

昔し支那に韓伯瑜と云ふ人あり其の人母に答うたるゝことあれ
 ど常には泣かざりしに或とき過ちありて其の母に答うたれしに
 常に變りて泣きたり母怪しみて其の故を問ひしに韓伯瑜の對に
 曰く是れまで答うたるゝ毎に我身にいたみを感じしに今日はい
 たみをおほへば是れ母さまの年老て力ら弱りたまへる故へなり
 と思ひて自から心に悲しくなりて泣くなりと嗚呼世の子たるも
 の誠に斯の如くならざるべからざるなり

いつまでも親のめからは子供なり子供心になるが孝行
 氏よりも育ちがらとて親おやを譽とするのが子のてらなり
 あわれみの深き餘りに惡き子を捨てるをすてぬ親のならいぞ

心の英俊

多ふやうも

あつらゆるはな

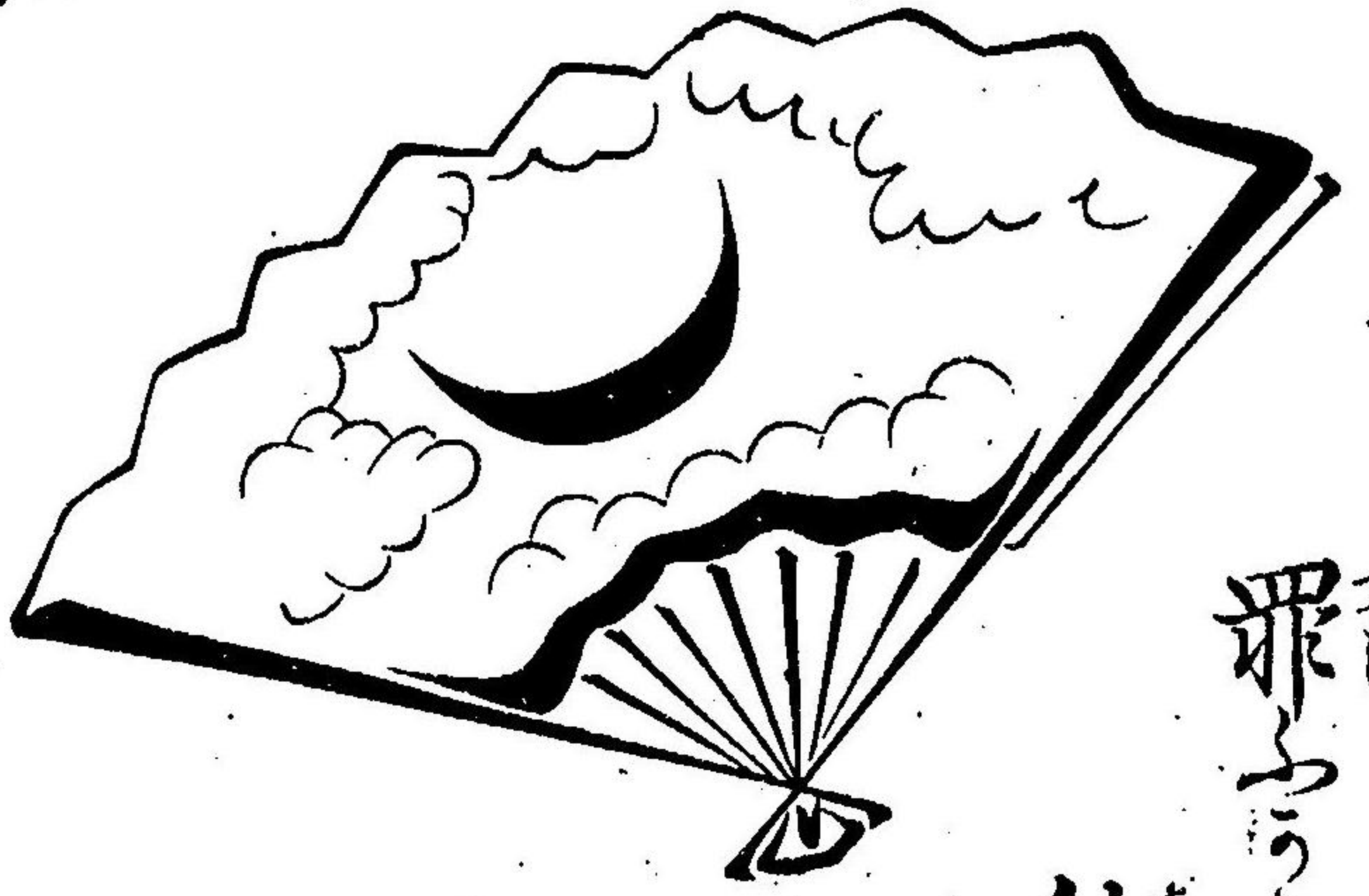
扇

表ある

人の世の中

武田法性院

信玄之詠



罪ふらさ 杖身に

秋の風

こらて

あふ

扇

とら

月磨

○言は易くして行ふは難し

古語に言はやすくして行ふは難しとマコロー氏云く他人の著述
講論の非點を指摘して之を難詰するは甚だ易しと雖も其の缺點
は宜しく斯く々々の改良を加うべしと指圖するは頗るかたしと
何事にても皆自然らざることをなし

○一遍上人おうた

あともなき雲にあらそう心こそなかく月のさわりなりけり
自れからあいあふ時も別れても獨りはいつもひとりなりけり
彌陀たのむ人は雨夜の月なれや雲はれずとも西へこそゆけ
古へは心のまゝにしたがひぬ今はこゝろよ我にしたがへ

○鈴木正三のうた

とし出るほこさきおれよ物事にたのむ心どかな槌として

○父母に仕ふるの道

諸君近來學問が進んで理學とか生理學とか法律學とか化學とか凡て學問が次第に進んで参りましたは實に喜ばしきことであります。之と同時に道徳も進みませぬと、折角の學問も水の泡となりまして遂には犬や猿に學問をさせたいも同様のことになります。夫れ故に恩を受けても之を報謝するの道を忘れて、大恩ある主人でも兩親でも病身なるか老年となれば不用なものとか面倒だと云う様なことになります。片輪の學問となり、片輪の學問と云うものは、何人も惡むものにて、随分恐ろしい社會の害物ではありません。故に古人の言に父の恩は山より高く、母の恩は海より深しとあります。實に我々が赤子の時より今日まで、兩親の胸を痛めたり、心配させたり、永の年月御恩を受たことは、筆紙にも言語にも盡されるものではありません。先づ生れ落るときから母のひざの上や

ら寢床の内を汚して、氣儘千萬の事を致します。母は之を少しも厭いもせず、如何なる寒中の雪夜でも起き、極暑の短夜も起きて、不淨をとりのけ、所全通常の親切では、とても出来るものでありません。又七才になると、學校に入れて、教育してくだされ、然るに壯年となりますと、自分獨りで生長した心も、ちで居ります。實に不孝千萬であります。古書を讀で見ますに、身体を傷つけぬ、よふするが孝の初めとあります。之は自分の身体と思ふな。兩親より受けた身だから、傷をつけるなよと云ふことでござります。此の心を以て、萬事に注意すれば、孝道の一途となるのです。殊更に、未來の大事まで聞かせて、貰ふよふに育て、くられたる。兩親の御恩は實に身を粉にし、骨を碎きて、も報せねばなりません。聞く時は、げにもと思ふ法の道家にかへれば、わすれこそすれではな

このさとおやの死したる子はなきか、御法の風になびく人なし、
 親鸞上人 ○佛法と世法は人の身と心一つかけてもたぬものなり、澤庵和尚 ○柴の戸にあけくれかゝる白雲をいつ紫さきの色にみなさん○そしる人南無阿彌陀佛を捨へしと教へばそれと魔と思ふべし法然上人 ○目に見へぬ地獄を胸に取りよせて我身を責る我心ろかな三五園 ○本來の面目坊の立姿た一目見てもより戀とこそなれ一休和尚 ○釋迦あみだ地藏やくしと名はあれどおなじ心の佛けなりけり鉄眼禪師 ○何事もいふべきことはなかりけり問はでことふる松風のこゑ澤水禪師百六十三才
 ○あさゆふのくちより出る佛けをばしらですぎにしことぞかなしき諦忍律師 ○いへばうしいねばむねにきはがれておもわぬさきや佛けなるらん後小松院の侍女一休和尚の母

明治廿五年四月十三日印刷
 明治廿五年四月十八日出版

版權
 所有

定價金五錢
 郵稅貳錢

著者兼 發行 河野智眼

福岡縣筑前國福岡市博多片土居町四十一番地

印刷者 廣瀬乙三郎

福岡市博多中嶋書肆

大賣捌所 林 谷助

福岡市博多麴屋町書肆

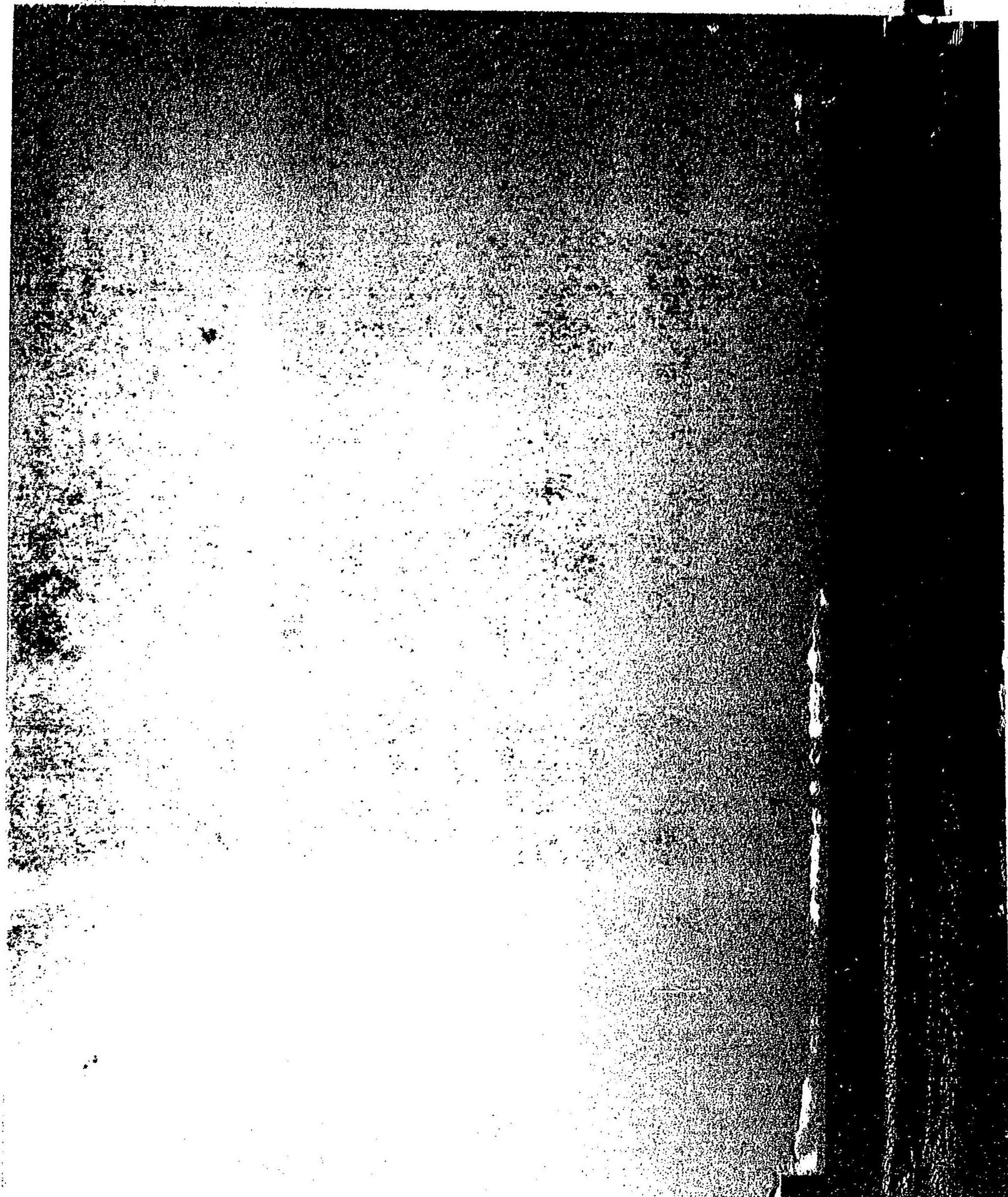
同 眞海徳三郎支店

福岡市福岡簀子町書肆

同 相川 錠吉

各地賣捌所

西京三條通り高倉東へ入	出雲寺文次郎
同 五條通り同	澤田友五郎
同 寺町松原下ル	永田長兵衛
東京麻布區飯倉五丁目	森江佐七
同 三十間堀町一丁目	明教社
大阪心齋橋筋一丁目	松村九兵衛
同 久太郎町	柳原喜兵衛
尾州名古屋市門前町	三浦兼助
越中富山上リ立町	福田清明堂
神戸市多門通り二丁目	日東館
薩州鹿兒島島仲町	吉田幸兵衛
静岡新通り一丁目	阪本屋儀助
越後 長岡	目黒十郎



10

心の鏡

国立国会図書館

009692-000-4

特48-530

心の鏡

河野 智眼/著

M25

AAE-0767



特

